
願いよ...

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願いよ…

【Nコード】

N1162BA

【作者名】

鈴蘭

【あらすじ】

蘭ちゃんのせい…蘭ちゃんさえ…蘭ちゃんさえ…来なければ…
四人の転校生が来てから始まった悪夢…

愛してしまった…彼女を…

快斗をかえして！返してよおお！

もう、遅いんだよ、青子。諦める…

返してよおお！！

青子と快斗のすれ違い。蘭を心から愛する快斗。快斗を心から愛する青子。

かなうことのない恋をする2人。

片思いする青子と快斗。

蘭は新一を新一は蘭を。両想いの蘭と新一。何もしていない蘭に青子が…

！？

「お前とは…単なる幼馴染だぜ？」

「私は好きなの…！快斗…大好き…！」

「青子ちゃん…ゴメンナサイ…。」

「蘭…愛してるよ…。」

「新一…私もだよ？」

すれ違う関係。どうすることもできない四人。何が原因なのか、何が悪いのか…それすら分からなくなる青子。はたして四人の運命は…！？

悪夢の始まり

「はじめまして、毛利蘭と…」

「工藤新一と…」

「宮野志保…」

「…と鈴木園子です!!」

ここ、江古田高校2 - Bの教室になんと四人の転校生が来たのであった。

なぜ、四人もの転校生がきたのかというと、数日前のことであった。

「先生、私たちってどこの高校行くんですか？」

「ああ、学校見学の…確か、江古田高校2 - B。一年間いるんだからな？」

「一年間もいるんですか!？」

「そうだ、おまえたち四人は仲がいいから特別に同じ高校にしてやった。まあ、ほかのやつらよりはいい高校だから、ついていけるかが心配なだけだ。」

「大丈夫よ、こっちには工藤君がいるもの。」

「そうだな…」

というわけで…

四人が江古田高校に一年間の見学者としてきたということだった。

そのことを、江古田高校の2・Bの先生がクラスメートに細かいところまで説明した。

「じゃあ、自己紹介：まあ、趣味、入っていた部活動、得意なことを…毛利蘭さんから…」

先生が言うつと、蘭は続けた。

「えつと…私の趣味は、家事、掃除で、入っていた部活は空手部です。一応主将キャプテンでした。」

蘭の言葉に男子全員が意外そうに「ええええええ!?」といった。しかも、あんな細い手足。そして、趣味が家事と掃除。いかにも家庭的である。

「それと…得意なことも空手です。」

男子も女子も驚く一言。

「えつと、俺は…趣味は読書（推理物）、部活はサッカー。得意なことは推理、以上」

女子は一斉に「キヤーツ」と叫ぶ。

まあ、仕方ない。あの、高校生探偵工藤新一なのだから。

「私は薬を開発する（実験）、部活は科学部、得意なことは工藤君を実験台にすること。」

最後の言葉に皆、不審に思ったが別に気にしていない…。

「私は、新一君と蘭をからかうことが趣味で、部活はテニス部！得意なこと2人をからかうこと！」

女子も男子も園子の言葉に意味不明だったが、特にまた気にしていなかった。

先生は一度咳払いし、四人が言った部活は江古田高校にすべてWということを説明し、四人の席を指定した。

新一は隣なし。

園子は後ろから二番目の席。

志保は園子の右ななめ前。

そして蘭は…

あの、世界的マジシャンの息子、黒羽快斗の隣の席となった。

(わ…ラッキー！)

快斗はそう思ったとたん、蘭は視線を感じた。

その視線の先には…

蘭そっくりの少女がいたのであった。

悪夢の始まり（後書き）

感想待ってます！

挑戦状

休み時間になると、新一と蘭と志保と園子は一斉に一つにかたまつた。

「ねえ、私たちどんなことを観察すればいいわけ？」

「さあ……」

「まあ、一応クラスメートの団結力とか？」

「そんなところでいいんじゃない？」

四人の意見が決まったところに快斗が蘭の目の前にやってきた。

「ねえねえ、みんなは仲いいの？」

「うん！そうよ。一応、こっちの大馬鹿推理の介と園子は私の幼馴染。志保は転校してきたの。それで今では親友って感じよ？」

一通り言つと快斗は「ふうん……」といいながら新一をじろじろと見始めた。

「な、なんだよ……」

「いや、男一人で……」

「ああ、園子が女つて見えねーからな。」

「どういう意味よ、新一君！じゃあ、空手抜群の蘭はあ？」

「蘭はねえ……うーん、手ごわい女。」

「どう意味かな？新一。」

ものすごい勢いで睨む蘭に新一は冷や汗をたらしながらすみませんと謝った。

蘭はクスツと無邪気に笑つて「よろしい」といった。

そんな無邪気なところも新一と快斗にはかわいらしいと思った。

「そうだ、俺は黒羽快斗。一応……」

ポンツと音を立てながら手から薔薇を出し、蘭に差し出す。

「マジックが得意。よろしくな！」

「わあ、すごいー！」

「へえー、すごいじゃんー！」

「やるわね。」

女子たちは歓声をあげるが、新一だけがつまらなそうに快斗を見る。

いわゆる、快斗に嫉妬。

「ちょっと、快斗、あんまり持てるからってねえ……」

そこには、蘭そっくりな少女が立っていた。

「ラ、蘭？」

園子言う。

しかし、どこか違う。

「いやちげえよ」

「誰？」

「中森青子っていうの。快斗の幼馴染。」

「へえ〜！」

蘭は興味ありげな顔をして聞く。

「だれかににてるね！」

青子を見て言う蘭。

それにズケツと転ぶ新一と志保と園子と快斗。
2人は自分にそっくりと思っていなかった。

しかし、これは青子の挑戦状。

青子と蘭はいったいどういう関係になっていくのか…

それが、これから始まる悪夢だった…

挑戦状（後書き）

今回短かったんですが…

じつは、前回の小説で主将のことを私はキャプテンと言っていました。

じつは、主将のことをキャプテンともいうことがあるんです。

私、空手習ってるんでいろいろと知ってるんです。また、変なところがあったら教えてください。感想待ってます！

止めることのできない恋

(今日も快斗、顔が赤くなってた…)

青子はそう思いながら、1人下校していた。後ろのほうには新一と蘭と園子と志保とそして快斗がいるのだった。

もちろん、快斗は蘭の隣にいた。蘭は一応新一の隣だったが、新一が快斗に嫉妬しまくっていたことは言うまでもない。

いつもは幼馴染の快斗と帰っていた登下校のこの道。

たまに道草食って遊んで毎日が楽しかった。

しかし、四人の転校生が来てから快斗は青子とではなく、青子にそっくりの蘭を中心に帰るようになった。

青子は教室の中でも親友の桃井恵子と小泉紅子としか話さなくなつた。というより、快斗が話しかけてこないのであった。

(蘭ちゃんにいつもべったり…)

そう、蘭が快斗の目の前に現れてからだつた。

こんなにも変わってしまった日常の原因は。

(蘭ちゃんの…蘭ちゃんさえ…蘭ちゃんさえ…来なければ…)

悔しい思いをする青子。

それを知らない快斗と蘭。そして、ほか三人。

「なあ、蘭、今日のご飯なんだ？」

(え?)

青子は後ろから聞こえてきた声に耳を傾けた。

「ああ、ハンバーグよ。」

(なんだ…工藤君か…そういえば…工藤君と快斗って…そっくり。)

今頃気づいた青子。

しかし、この際どうでもよかった。

たとえそっくりでも、青子は快斗しか愛することはできない。

だからこそ、この恋はあきらめたくないのである。

(快斗が…失恋だったらいいのに…そしたら…青子のほうにも希望はあるよね? 蘭ちゃんさえいなくなれば、快斗だって諦めるよね?)

そう考えた時だった。

蘭ちゃんさえいなくなれば

そう思った時、青子は最悪なことを計画してしまったのであった。

蘭がいなくなる計画を…

止めることのできない恋（後書き）

わあ、青子ちゃんが悪人にいい！？
誤字脱字、目だったらゴメンナサイ・・・！

計画実行

私の名前は中森青子！

江古田高校2 - B、元気な明るい子です。

でも、今は明るくも元気でもない。

最低な、どん底に落ちている青子です。

そう、青子は警部の娘ながら最悪なことを計画しようとしているのです。

だって、悪いのは蘭ちゃんだもん。

蘭ちゃんさえ江古田この学校高校に来なければ、青子はこんなこと計画しなかったもの。

だから、悪魔を追っ払うの。

青子が正義の味方になるの。

青子が頑張らなくては快斗が悪魔に飲み込まれてしまうもの。

快斗のためにも、青子のためにも頑張らなくちゃいけない。

警部の娘なのに？

最低？

それが何？

青子は正義のためにやってるのに…みんなどうかしてる。

青子、つかまらないもん。

お父さんが警部だし。

青子は正しいことやってるもの。

「青子ちゃん！」

そらきた。

勝手にやってくるうるさい女。

むかつく女。

快斗を奪った女。

「何？あ、ちようどいいや。ちよっときてー！」

青子は無理矢理彼女を屋上へ連れていく。

屋上へ着くと涼しい風が青子たちを見守るように吹いている。

さあ、ラストチャンス。

今からいう質問に青子が思った通りにこたえてくれれば何もしない。
違っていたら、その場で…

屋上から突き落とす。

「蘭ちゃん、今からいう質問なんだけど…」

「質問？」

「そう、質問！」

「なんの？」

「いいから。じゃあ、蘭ちゃんに好きな人はいますか？」

「え…」

いるの？いないの？

「い、いるかな…」

あ、そう…

ったく、

役立たず。

「その人はあなたの近くにいますか？」

「うん…いるよ…」

へえ…いるんだ…

快斗なんでしょ？

「その人は…誰ですか？」

素直に言っ方がいいのよ？

ただし、回答によっては

あなたの命は

ないわよ？

「私の好きな人は…」

新
…

工藤新一だよ？」

え…！？

工藤…新一…？

高校生探偵の…快斗にそっくりな人。

その人が好きなんだ…

なんだ…なんだ…

そうだったの…なら…青子は蘭ちゃんの恋を応援すればいいんだ。

そして、工藤君と蘭ちゃんが付き合ったのを快斗が知る。
諦めて、青子に振り向いてくれる…！

いい！それいい！

「ねえ、青子ちゃん、何のために質問？」

「ううん、青子も好きな人がいるの！そのことで蘭ちゃんも好きになっ
てないかなあ〜！って！」

「あ、そうだったんだ！で？青子ちゃんは誰が好きなの？」

「快斗だよ！小さいころか大好きなんだ！」

「へえ〜私も。私も新一が小さいころから好き。いつも守ってくれ
て…新一は私のことどう思ってるのか分からないけどね…」

哀しい顔をする蘭ちゃん。

蘭ちゃんでもこんな顔をするんだ。
確かにそうだ。

蘭ちゃんって気の強そうな感じじゃない。

空手をやってるって言ってたけど、すごく優しそう。
だからこんなに悲しい顔をするんだ…

素直だから…

「蘭ちゃん！青子、蘭ちゃんの恋応援する！」

「本当…？」

「うん！だから、蘭ちゃんも青子の恋応援して！」

「うん！約束しよう！」

青子、さっきまで殺気が漂っていたのに今は蘭ちゃんの友達になっちゃったし…

なにやってんだか、青子ったら。

でも、聞いてよかった。

あとから後悔するなんていやだもんね。

でも…やっぱり蘭ちゃんへの違和感は変わらないんだ。

なんか、このままじゃいけない。

もっともっと…

深い違和感がある…

蘭ちゃんと仲良くなったらいけないような…

悪夢が待っているような…

私はその日、家に帰って夜になってベッドに入って寝てしまったら
変な夢を見た。

すごくいやな夢…

快斗が…快斗じゃない…

青子とは単なる幼馴染だよ

青子？あんな奴好きじゃねーよ

蘭ちゃん…おれ、蘭ちゃんのこと愛してる…

付き合ってくれねーか？

なんで？なんで工藤なんだよ！俺は…こんなにも蘭ちゃんを愛し
てるのに…

蘭ちゃん、俺はあきらめないよ？

蘭ちゃんと工藤が付き合った？
工藤が消えればいいんだな？

快斗しか出てこない夢。
嬉しいはずなのに、内容は最低だった。

まるで…これからの出来事を予知しているかのよう…

計画実行（後書き）

感想お待ちしています！

夢が現実になる始まり

変な夢だった。

青子は朝起きると、夢で見た、快斗が快斗じゃない夢を思い出していた。

青子を幼馴染としか見てなくて、苦しいほど蘭ちゃんを愛していた快斗。

目が合うことのない快斗。

夢の中でもそうなんだ…

現実でもそう。

快斗は目を合わせてくれない。

いや、目はあってるんだと思う。

でも、その目は蘭ちゃんへと向かっている。

青子を蘭ちゃんだと勘違いしているような眼で見ている。

でも、すぐにわかってしまうのだ…

だから、すぐに目をそらし、蘭ちゃんのほうへと向かっていく。

どうして…？

幼馴染って本当に思ってる？

本当は、単なるクラスメートって思ってるんじゃないの？

どうしてよ…

蘭ちゃんが来て…蘭ちゃんに一目ぼれして…

そうして、青子を見なくなった。

青子の存在は、快斗のなかにいるの？

快斗…青子はこんなにも苦しいほど快斗のことが好きなのに…

どうして…どうしてわかってくれないの…？

そんなことを考えている間に青子はいつの間にか学校についていた。

朝ご飯食べたっけ？

お父さんにご飯作ったっけ？

お父さんに「行ってきます」って言ったっけ？

疑問符が青子の頭に浮かびあがる。

まあ、いいや。

ちよっとぐらい…ちよっとぐらいいいじゃない。

青子はそう思って、蘭ちゃんのほうを無意識に見てしまった。

快斗と笑顔で話す蘭ちゃん。でも、彼女は好きではないと言っている。

信じてもいいんだよね？

青子は、蘭ちゃんを信じてる。

だから…恨みはしない…よね？

なんだか不安が青子の中で渦を巻いている。
なんだろう…
これから嫌なことがあるような気がして…

そう思ってる時だった。

いきなり、蘭ちゃんがバタツと音を立てて倒れたのだった。

無理…してたんだ…！

真っ青な顔をして倒れる蘭ちゃん。

女子が悲鳴を上げる。

快斗は蘭ちゃんを抱き上げようとした時、素早く工藤君が蘭ちゃんを抱き上げた。

お姫様だっこされてる蘭ちゃん…うらやましい…と言いたいところだけど、そんなこと、考える暇なんてない。

工藤君も青い顔をして蘭ちゃんを急いで保健室へ抱き上げながらい

った。

蘭ちゃん…大丈夫かな…！

青子は蘭ちゃんの親友の園子ちゃんと宮野さんを連れて保健室へ向かった。

蘭ちゃんはさっきよりは顔が赤くなってすやすやと寝ていた。

きれいな顔…

かわいらしい顔…

「新一君！蘭は?!」

あせる園子ちゃん。

青子もその答えが聞きたい。

「ああ、先生によると睡眠不足だよ。」

「変ね、蘭が睡眠不足なんて…」

「ゲームでもしてたんじゃないの？」

私の発言に三人は「ハア？」とでも言いたそうな顔をした。

え？ち、ちがうの？

「何言ってるのよ。蘭はゲームなんかしないわ。蘭がやるといえば家事と掃除、そして工藤君のお世話。あと…空手ね。」

あ、そうなんだ…

そういえば、自己紹介の時いってったっけ。

そんな話しをしているうちに快斗が青子たちの目の前に現れた。三人がキツと睨むように快斗を見る。

まるで、「蘭が倒れたのはおまえのせいだ」とでもいうような顔。

青子は何も言えず、ただ黙っているだけだった。

「蘭ちゃんは!?!」

「寝てるわよ、見てわからない?」

宮野さんの嫌みたっぷりない方に快斗が宮野さんを睨む。

にらみ合う工藤君と快斗、園子ちゃんと快斗、宮野さんと快斗。

青子はその場に居られなかった。

いることが許されるのだろうか？

青子は…

この関係に入られることができるだろうか…？

そうやって睨みあっているうちに蘭ちゃんが瞳を見せた。

きれいな澄んだ瞳は私たちを順に見ていく。

「あ…私…」

「蘭！」

一番最初に声を上げたのは工藤君だった。
嬉しそうな甲高い声。

「新…園子…志保…青子ちゃん…黒羽君…」

順々にいっていく蘭ちゃんは哀しげな表情だった。

「ごめんなさい…私…何してたんだろ…？」

「蘭はさっき倒れたんだよ…」

工藤君がベッドに寝ている蘭ちゃんに優しい声で言う。

「そっか…ごめんね、迷惑かけちゃって…」

心からそういつているような顔で私たちに言う。

そんな表情もかわいらしかった。

「蘭、何で睡眠不足だったのか、心当たりある？」

宮野さんが単刀直入に言った。

青子は同感した。

早く聞きたい。

蘭ちゃんに何があったんだろう？

「空手の東日本大会が近かったの。だから、夜まで練習してたの。

絶対優勝したかったから…」

熱心な蘭ちゃん…

きっとお父さんも知っているんだろう、なんてよい娘なんだろうっ

てね。

青子、蘭ちゃんのこと尊敬しちゃった。

「でも、蘭ちゃん！無理しちゃったら余計迷惑だよ！次からはちゃんといつてよ？」

「まあ、いう人は、新一君にしてよ？蘭を守るのは騎士^{ナイト}である新一君だけなんだから！」

「ちよつと、俺がいるじゃんか！」

快斗の声が保健室に響く。

青子も含めて五人が一斉に快斗を見る。

「え…何？」

「あんたに蘭は守れないわ！」

「蘭が守れるのはただ一人、工藤君だけよ？」

女子たちの攻撃が快斗に襲いかかる。

青子は

止めてあげたくない…

そう、蘭ちゃんのことをおきかえてほしい…

そう思い続けただけであつた…

夢が現実になる始まり（後書き）

蘭ちゃんって本当に可愛いですねえ〜！
というわけで、感想待ってます！

園子はやにやしながら新一と蘭を交互に見る。
そんな顔には「あんたたちが主役をやりなさい」とでもいうようだった。

「そ、それで、皆さんはどの役をやりたいですか？
委員長が改めていう。」

みんな、主役以外のものに手を上げていく。

そして、主役がまだ決まらずにみんな黙っている時だった。

二つの手が上がる。

「はいっ！先生！私は蘭と新一君を提案します！！」

「「はあ！？」「」

「あんたたち、まだ約決まっていなかったよね…？」
「にやっ」と笑う園子。

うっと言葉を失う新一と蘭。

「先生！俺の手も上がってるぜ?!」

「な、なんだね?」

「俺が主人公やるから、ヒロインを…」

蘭ちゃんに!」

「「ええええええええ!?!?!」」

園子、新一、蘭が同時に言う。

快斗はキョトンとして「へ?」といった。

「あんたねえ!もう主人公は決まったのよ!?

先生、蘭と新一君で決定です!?!文句ある人、手をあげて!」
ならむ園子に誰も手を上げない。

ということだ…

主演二人は新一と蘭に決まってしまった。

「ちえ…俺と蘭ちゃんのほうがよかったのに…隣の席なんだし
さあ…」

快斗はつまらなそうにそっぽを向いた。

授業が始まると、快斗が蘭に話しかけ始める。

「ねえねえ蘭ちゃん、明日の家庭科でクッキー焼くんだよね?」

「ええ、そうだったような…」

「なら俺にちょうだい!」

「でも・・・先客がいるの…」
「だれ？」

目を光らせる快斗。
まるで猫。

「新一よ。」

「ふうくん・・・蘭ちゃんは工藤が好きなの？」

「…」

蘭は黙ってしまった。

快斗はそれを見て何かあったのかと思った。

「なあ、今日カフェにでも行こうぜ？」

「え・・・？」

「いいからさ！ね？」

「う、うん…」

蘭は仕方なく承知してしまい、放課後、快斗と蘭はカフェについた。

「かわいいところね…！」

蘭は店の中をきよるきよるとみて席に着く。

「ねえねえ、それで？工藤と何かあったの？」

「ううん・・・ただね、私の片思い。」

「え？片思い！？」

快斗は蘭の言葉に驚きを隠せず大声を出してしまった。

「ちょっと、声がでかいよ…！」

顔を赤くしながら言う蘭。そんな顔でもかわいいと思ってしまう快斗。

「新一…なんかさ、最近私に冷たいの。ご飯作りに行っても目を合わせてくれない…」

蘭は悲しそうに話を続ける。

「私がいなくなればいいのかなあ…って。しかも、主役になっちゃうし。」

「蘭ちゃん…」

二人がそんな会話をしている、二個後ろの席ではなんと、園子と志保と新一が聞いていた。

新一は蘭の言葉に顔を赤くしたり、悲しそうな顔をしたりしていた。

「それで？新一君。あんたたちは両思いつてことになるけど…」

「…うつせ…」

「あなた、蘭のことが好きなら蘭は優しくしなくちゃ…」

園子と志保の攻撃に新一は顔を赤くしながらそっぽを向く。

「なんで冷たいのか、予想してみると…原因は黒羽君ね…」

「そうねえ…彼をどうにかしないとねえ、新一君。」

二人の予想はばっちりあたっていた。

新一は完全に快斗に嫉妬していたのである…

「あんだねえ、嫉妬するよりも、蘭にやさしくして、蘭を黒羽君に渡したらダメ！」

園子の言葉は一生懸命応援するような声だった。

新一は「わかった」というと、コーヒーを飲みながら二人をじっと観察して何かを考えていたのであった…

「それじゃあ、ありがとね、黒羽君。あ、おごるよ。」
蘭が席を立つ。

「いって。おれがおごるから。じゃあねー！」

蘭は「そう…ごめん！」と言いながら店を出て行った。

三人は蘭の行動よりも快斗の行動をチェックしようと、快戸を尾行するのであった…

快斗が人気のないところに行くよ

「そろそろ、尾行やめたら？名探偵たち…」

といたのであった。

三人は気づかれたと思い、新一がサツと姿を現した。

「気付かれてたか…」

と聞いた・・・

男の対立（後書き）

えっと、長くなりそうだったので後回し。
感想待ってます！

夢の言葉

「気付かれたか…」

新一が茂みの中から快斗と顔を合わせる。

お互い、目で戦って引く暇もないような感じ。

志保も、園子も同時に茂みから出てくる。

「なあ、蘭ちゃんから手を引けよ…」

「いやだね」

「俺はね、めちゃくちや蘭ちゃんを愛しちゃったんだよねえ」

「どんなところが？」

「顔から性格まで。すべてだ」

「へえ…俺も全部だぜ？でも、おまえが知ってる蘭と俺が知ってる蘭とは天秤に掛けるとこっちのほうが重いぜ？しかも、俺のほうが蘭を知っている。」

冷静に言いあう男たち。

「あれえ？どうして青子の家の前に？」

「へ？」

「あ、青子ちゃん！？」

「中森さん！？」

「青子！？」

そう、四人のいる場所は、青子の家であった。

青子は三人でいることに驚いていた。

「ねえ、どうかしたの？」

「単なる…」

「男の争いよ。」

あきれたように言う園子と志保。

何も知らない人ならば理解不能だが、青子はわかっていた。

すべて聞いていた。

先ほどの会話、すべてを。

たまたまスーパールの帰りに聞こえた、男の声。2人いることはすぐわかっただろう。

そして、顔を見ると、快斗と新一であった。という感じ。

(蘭ちゃん争い…か)

青子はそう思つて「そう、じゃあね、また明日！」と言つて家に帰つていった。

「青子ちゃん…無理してたわね。」

「ええ、彼女にも気をつけたほうがいいわね…」

園子と志保が中森家を見上げながら言った。

そして、2人の言い合いが続いた。

「蘭は俺のもの！」

「いや！俺のもの！」

「俺と蘭は両思いなの！」

「俺は彼女を振り向かせる！！！」

「そんなの無理だね！」

「やってみなきゃ分かんねーさ！」

「そうかな？！」

「何い！？」

2人の言い合いは、まだまだ続きそうだ…

そんな2人の言い合いを玄関のドアを背にして聞いている、青子がいた。

青子は快斗の言葉一つ一つが胸に突き刺さっていた。

青子は…もういない存在なのかな？

蘭ちゃんのせい…蘭ちゃんさえ来なければ…！
返して…快斗を返して…！返してよおお！！

青子は言葉にできないほど苦しい恋をしていた。

ふりむくことのない彼。

それでも、愛し続ける青子。

昔から好きな彼を、まだまだ愛し続ける青子。

言葉にできない思いを涙で表すことしかできない。

そのとき、ふとよみがえったのはあの、変な夢のことだった。

青子とは単なる幼馴染だよ
青子？あんな奴好きじゃねーよ

「そついえば、中森はどうなんだよ!」

「青子とは単なる幼馴染だよ。」

「本当かなあ?好きなんだろ?」

「青子?あんな奴好きじゃねーよ。」

夢が言った言葉が・・

現実になって行く時だった…

夢の言葉（後書き）

ちよっと、後回しにしちゃいましたあ…！

感想待っています！

思いを伝えて

青子は今日、工藤君を屋上に呼び出した。
放課後、夕日がきれいに見えてすごくきれいだった。

「ねえ、蘭ちゃんのこと好きなんですよ！？早く告白したほうがいいよ…！」

「へ？」

「蘭ちゃん、言ってたよ？工藤君のこと、好きなんだって、小さいころから好きなんだって！快斗に取られる前に…工藤君がとって、快斗の目を覚まさせて…！」

青子は一生懸命言った。

そう、これは、蘭ちゃんの運命も青子の運命もかかっているの。

工藤君で変わる…

工藤君で変わるの…

工藤君が蘭ちゃんに告白さえすれば、快斗は青子に振り向いてくれる…！

青子はそう信じて、屋上を出て行った。

屋上から出ると、そこには蘭ちゃんがいた。

前もって呼び出しておいた蘭ちゃん。
なぜか悲しそうな表情。

「どうかした？蘭ちゃん。」

「いや…ちょっと、最近新一冷たいからさ…何のことで呼び出され

たのか分からなくて…」

一応、工藤君が呼び出したってことになってるけど、工藤君は何も知らないの。

「そうやってしょんぼりしないで！きっとHAPPYになるよ！」

「本当？」

「うんうん！」

青子は自信を持っていた。

でも、それは違った。

確かに、初めはよかった、作戦通りだった。
でも…その後が違った…

青子はそっと、2人を見ていた。

「新一、何？話して。」

「へ？俺呼び出してね ぜ？」

「え？でも、青子ちゃんが…」

あーあ、ちょっとすれ違ってる。
まあいいか。

わかったと思う。工藤君のあの顔は…

(なるほど、中森がやってくれたんだな)

あ、気持ちが変わったのね!

よしよし、今すぐ告白よ!

「なあ…蘭。」

「ん?何?」

「あ…いや…」

「つたく、度胸がない…」

「もーっ!男ならちゃんと言いなさいよ!…」

「へ?」

「え?もしかして気づいてる!?工藤君の気持ちに!

「事件で早退した時に習った授業のノートを見せてくれって!」

「は?」

はい？

全く違うんですけど…

ていうか、どんだけ鈍感！？

いや、屋上とくれば告白ってわかるだろっけど…

「あれ？違うかった？」

「あ…いや…実はそうなんだよ！」

「あーっやっぱり！？」

おいおいおいおいおいおいおいおいおい…

納得しちゃうの？

「んなわけねーだろ!？」

「へ？」

よく言った工藤君！

「…好きなんだよ…おまえしか俺の中にいねーんだよ。
愛してるよ…だからその…付き合ってくれねーか？」

おおー!

いいなあ、そのセリフ。

青子も言われてみたい…!

「へ…？」

へえ……新一私のこと愛し……

「本当に…？冗談でからかってるんじゃないよね？」
「あたりめーだろ？」
「じゃあ…私も…新一のことが好きで、愛しています…！だから…私からのお願い。付き合ってください…！」
「あたりめーだ！」

よく言った、蘭ちゃん！

2人とも両思い！
そして、恋人同士！

青子はパチパチと拍手をしながら2人の前に現れた。

「おめでとう、2人とも！青子、感激しちゃった！恋人同士になったんだよね？」

「あ、青子ちゃん！？今の…見てたの？」

「もちのろん！」

「ハア…！」

2人してため息をつかないでよもつ…

「じゃあ、キスしちゃえば？」

「はあ！？」

「青子、もう帰るから！じゃあね！」

とって、またドアのところに隠れて2人の様子を見る青子。

「蘭…愛してるよ…」

「新一…私もだよ？」

あ…

キスした…

深い深いキス。

青子も…快斗とそんなことしてみたい。

2人はキスをした後、

仲良く2人で帰って行った。

次の日だった。

事件が起きたのは…

思いを伝えて（後書き）

青子ちゃん、2人を見事くっつけましたあ！

お見事！

でも、次の日、大変な事件が…！！

感想待ってます！

悪魔の降臨

「蘭！よかったね、両想いになって！」

「え？え？」

「おめでとう、工藤君。」

「おめでとうー！工藤！」

「はい？」

次の日、新一と蘭が登校してくると、2人が両想いになったことをなぜか知っていた・・・

実は…すべて青子が知らせたのであった。

まあ、園子と志保だけに話したのに、園子がクラス中にはらまいた、とでもいえば簡単だろう…

「快斗、おはよう！」

いつものように話しかけてみる青子。

でも、快斗は答えようとしなかった。

「快斗？」

「工藤…！」

なんと青子の予想だと、自分に振り向いてくれるはずが新一をすくなく怒っていたのであった。

青子はやばいことになったと思った瞬間だった。

快斗が新一に飛びかかったのであった。

「新一！あぶない！」

快斗の手にはカッターのような刃物を持っていた。

蘭が新一の前に立った時、

ズサツと音がした。

「蘭！！！」

「蘭！！！」

「蘭ちゃん！！！」

「毛利！！！」

「蘭！！！！！」

新一をかばった蘭が代わりにおなかを深く刺されたのであった。

蘭は血だらけのおなかを押さえる。

「蘭！今すぐ、保健…いや、とにかく、救急車よ！あと、先生にも連絡を！」

志保がみんなに命令する。

快斗が真っ青な顔をして蘭を見ていた。

「てめえ…蘭になんてこと…」

新一が快斗の胸ぐらをつかみいまに殴りそうな声で言う。

「ら…蘭ちゃん…」

快斗はそれしか言えなかった。

その言葉に新一はカチンと来た。

パンッ

大きな音が教室に響く。

快斗の頬が赤くなっていた。

ぶったのは…

新一じゃなく、

園子だった。

「あんだねえ…まず謝るのが先じゃないの…！？蘭がどれだけ痛がつてるか…わからないの！？」
あんだのせいで…あんだのせいで…！！！」

園子は怒りに震え、もう一度殴りそうな勢いと、その時、
「やめて…もういいから…私は、平気。だからさ…もう、誰かを責めるのはやめて…。」

苦しそうな声をして一生懸命言う蘭。

「蘭！しゃべるな…！」

「お願い…誰も…責めないで…。」

痛い…

それだけの感情が蘭を襲う。

「蘭…もういいから…！ごめん…」

園子はそういつて蘭の目の前に立って「もうちょっとで救急車来るから」と言っつて励ます。

新一は怒りに震えるばかりだった。

「新一…怒るだけじゃ…何も進まないよ…?」

蘭の声は震えていても…

優しい声だった。

そんな声で、新一は一旦怒りを抑え、蘭とともに救急車へ乗って行った。

病院へ着くと、蘭は手術室へと運ばれた。

「工藤君、少しは落ち着いたら?」

手術室前をうろつろと歩く新一。

「これが落ち着いてられつか…」

「あたしだって落ち着いてなんかいられないよ、志保。」

「そうね、蘭ですものね。」

三人はそれきり黙ってしまつ。
何も言うことのできない。
ただそれだけで、蘭を待ち続けていた。

「あ…！」

園子が声を出す。

手術中というランプが消えたのであつた。

中から医者が出てきて

「もう大丈夫です！あとは入院して回復するのを待つだけですから
…」

医者の言葉に三人はホツとして、「よかった」とつぶやいた。

「毛利さんはあと一時間後には目を覚ますでしょう。」

医者はそういつて三人を後にした。

三人とも蘭のいる病室で静かに蘭の寝顔を見つめていた。

蘭は新一をかばつた。

新一はすべて自分の責任と感じているようだった。

自分がかもつとしっかりかりしていれば、こうなることはなかった。

「蘭ちゃん！」

途中で青子が病室に駆け込んだ。

「あ、青子ちゃん！」

「蘭ちゃんは？」

「今寝てるよ…！ありがとね、来てくれて。」

「青子だって蘭ちゃんの友達だもんね！」

青子はにっこり笑って病室を後にした。

でも、次に来た人に悪夢が遅いかかる。

悪魔の降臨（後書き）

次来た人って、誰なんでしょう…？

蘭ちゃん、よかった…！回復できるよつになつて。
感想待ってます（＾Ｏ＾）ノ

男の悲鳴

「…黒羽…」

新一が小さなつぶやくような低い声で言った。
ドアを後ろにして立っている快斗。

快斗を睨む園子、志保、新一。

複雑な視線が快斗に向けられ、快とはいられるような状況ではなかったが、持ち前のポーカーフェイスで焦りを隠していた。

「蘭ちゃんは？」

「手前えが刺したんだろ？自分で考えてみるよ。」

「そんなんじゃないわからねーな」

「なら担当の先生にでも聞きな。」

「ハッ、どうしても自分たちではいえねーよう…」

「言えるわよ？」

声を出したの志保だった。

志保は冷静で相手を見下しているようだ表情で話を続けた。

「私たちにだって口はあるんだから言えるにきまつてるじゃない…」

「あ、そう。で？蘭ちゃんはどなの？」

「蘭のこと、気安くちゃん付けで呼ばないでくれる？」

「なんで？」

「あなたが傷つけたんでしょ？蘭だって嫌がるはず…まあ、それはないとおもうけど。」

志保はいたって冷静、しかし、その冷静さが怖い…

「蘭が一番傷つくの、知ってる？」

「？」

「新一君が死んじやったり、傷ついたり…そして、蘭のもとから姿を消すこと。つまり、黒羽君がやるうとしたことはすべて、蘭が傷つくことなんだから!!」

園子も応戦する。

「俺はな、蘭に何かあった時はな…やったやつを探偵でも殺しに行く。特に蘭が死に至った時は派手な殺し方だからな…」

「お、おい…今殺るわけねーよな？」

びくつきながら言う快斗。

震えているのが一言でわかる。

その声を聞くと志保がハッとひらめいたように

「なら、新しい実験台にでもなる？」

「いいわね、それ…」

「いいな…！」

三人が不敵な笑みを浮かべる。

快斗はその瞬間とつかまった瞬間、二階の叫びをあげた・・・

男の悲鳴（後書き）

ちよつと早い話でした…
タイムアップでしたあ…
感想待ってます！

劇の台本

蘭が一週間後に目を覚ました。
学園祭まであと三週間弱。

蘭が目を覚ましてことを知ると、クラスメート（特に女子）が病室にどよどよと入ってきた。

病室にもともといた新一、園子、志保は驚きながらも蘭に話しかけていた。

「そういえば園子、私と新一、劇の主役よね？」

「ええ、そうよ。」

「セリフ分かんないし、名前が…」

「ああ、それね。」

園子が蘭の話聞いて、かばんから二つ、「シャッフルロマンス」と書かれた本を新一と蘭に渡す。

2人はこれを一目で分かった。

劇の台本だと…

「何何…？あらすじはつと…えええ！？またこれ？」

「その続編ってどこ。前は事件で…」

「あ、そう…」

「それに、志保がいるしね。」

「え？」

「志保は召使役、でもその召使はスパイってこと。しかし、そのスパイはいつのまにか愛してしまう…だから、そんな役ができるのは志保だけってことで決まったのよ！」

「ふ〜ん…」

「まあ、ハート姫とスピードはキスしちゃうんだけど…」
「え!？」

「いいじゃない、あんたたち恋人同士なんでしょう?」

「で、でも…ねえ?」

蘭が新一に話を向ける。

新一も顔を真っ赤にして何も言えない状態。

2人して真っ赤な顔をしているので志保はあきれ半分に

「まあ、工藤君のことだから本当にしちゃうわよ、きっと。だって愛しの彼女が目の前、しかも顔が近いのになんか言わなかった方がおかしいもの…ねえ、工藤君?」

面白半分で言う志保に新一は

「わかったよ…すりゃーいいんだろ?」

と言ってしまった。

これには蘭も驚きだった。

「ちよつと、新一!お父さんが来るんだよ!？」

「いいって…」

「あんたねえ…」

蘭はジト目で新一を見るがお構いなし。

そして、台本のセリフを覚えて行った。

「えつと…」スピード、一緒に遊びませんか?」

「駄目です。またどこかで貴女の命を狙っている者がおります。」

「『そうですね…待っててください、今すぐ召使を呼んでお菓子で

も食べましょう!」

「『お待ちしておりますね。』」

ここでいったん2人はハアとため息をついた。

「どうかした?」

「全部敬語なのよ…なんか、新一じゃないし。」

「蘭じゃないし。」

「ぐちぐち言わずに暗記よ!暗記!」

園子は睨みながら言った。

「あ、次志保のセリフ。」

「はいはい。『どうか耐えましたか、姫さま。』」

「『いえ、お菓子をと思ひまして…』」

「『なら、少々お待ちを。』」

「『はい!』」

これまた一回ため息。

2人には苦勞の連続であつただらう…

あと三週間弱。

それまでに、

悪夢が降臨しなければ…

三週間弱…

降臨すれば…

もう少し、短くなるであらう…

劇の台本（後書き）

悪魔が降臨する時、蘭と新一の運命は？

今回、快斗と青子は登場しませんでしたあ！

すみません（<―>）

感想待ってます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1162ba/>

願いよ...

2012年1月6日09時48分発行